

最優秀賞 国土交通大臣賞

「水」が教えてくれたこと

愛知県 新城市立新城中学校

二年 白井夏純

「あなたたち日本人は、もっと水を大切にすべきです。」これは、私が四年前に出かけた「愛・地球博」でパキスタン人のシャーさんから直接言われた言葉です。それまで、蛇口をひねると安全な水が出るため、水について深く考えることもなく過ごしてきた私にとって、強く印象に残る言葉でした。

「水」を意識しながら本や新聞を読むと、世界各地では、砂漠化や干ばつで水不足の状態にあり、トルコ、シリア、イラク間などでは水をめぐる紛争まで起きていると分かり驚きました。日本では大丈夫なのかと不安になり、地域で開催された勉強会に参加しました。

私が住んでいる新城市でも、昔は豊川の川幅が狭いことから水不足や洪水を繰り返し、住民はとても困っていたそうです。そこで宇蓮ダムを造り、山に降った雨をダ

ムに貯め、水を有効に利用できるようにしました。また、二〇〇一年には、将来大きな地震が起きた時も水に困らないように、地震に強い大島ダムが造られました。さらに「水の貯金箱」とも言える調整池を造り、豊川の水が増水した時には水を入れ洪水を防ぎ、不足した時には水を出し川に流れる水の量を調整し、ダムから流す水の量を少なくする工夫をしています。

このようにして流される豊川の水を浄水場で飲料水にし、各家庭に送られてくるのです。私たちが降水量に係なく一年を通して安心して水を利用できるのは、こうした二重、三重の備えと、常にそれを守る人たちの努力があるからこそなんだと実感しました。そして一滴の飲み水ができるまでには、多くのエネルギーと時間がかかることも知らず、当たり前のように、思いっきり蛇

口を開き、水を使っていた自分が恥ずかしくなりました。

また、新城市を流れる豊川の水は、飲料水ばかりではなく豊川用水を通り、遠く離れた渥美半島や蒲郡に運ばれて農業や工業に広く使われています。水は、私たちが毎日食べる米や野菜を育てたり、便利な自動車などを造り出したりする時にも大量に使われているのです。今の日本の豊かな生活は、いろいろな場面で水に支えられていることに気づきました。

私は、大島ダムでお話を聞いた時、水面に緑のダムである森林が映る穏やかで美しい景色を見ました。流せば洪水を引き起こす大量の水をこうして蓄えることで、貴重な資源となり人々の生活を潤していると知りました。そして、目の前に広がる深い緑色をした水が、とてつもなく大切な財産のように感じられ、この水を守るために私でもできることはなんだろうと思いました。

この体験がきっかけで私は、さまざまな環境活動に参加したり、エコ生活に取り組んだりしています。その中で、「水を大切に使う」という言葉には二つの大きな意味があると思うようになりました。一つ目は、節水に心がけ水の使用量を減らす工夫をすることです。私は、毎年

七月に環境家計簿をつけていますが、家族で節水の

アイデアを出し合い、それを実行し一年かけて約二十四％の節水に成功しました。二つ目は、使う水を汚さない工夫をすることです。私の母校の舟着小学校の生徒が毎年豊川の中流域で、水生生物による水質調査を行います。日本一の清流に選ばれたことがある豊川の水ですが、下流に行けば行くほど、すこしずつ汚れていて残念です。原因は主に生活排水です。私たちが川や海を汚すことで、絶滅する生物がいることや、私たちが汚れた水の循環の中で生活しなければならなくなることを忘れてはいけな

いと思います。

「水」は、地球上の生物にとって、必要不可欠であり、限りある大事な宝物と言えます。私は、コップ一杯の水も、得ることが難しい国々の人たちの苦労を考えながら、これからも「水」を大切に、大切に使っていきたいです。自然の恵みときれいな水を支えているすべての人に感謝の気持ちを持って。

優秀賞 全日本中学校長会会長賞

受け継いでいく水

奈良県 奈良市立都祁中学校

三年 宮 久 保 晴 加

四月、通学路の両側に、しろかきの終わった田んぼが広がる。水面は、木々の青葉や山桜、周囲の家々を鏡のようにくつきりと映し出し、朝日が当たれば、きらきらと輝く。わたしは、さわやかな気分で自転車をこぐ。

「この辺は、『友田白石碁盤のおもて、なぜに裏毛が取れぬやら。』と昔から言うんや。」と祖父は言う。水田の広がる風景は、確かに碁盤のように平らだ。標高四百メートルの涼しい高原なので、二毛作は無理だが、空気も澄み、水もきれいで、昔から米作りが盛んだ。お米はおいしいく、町からわざわざ買いに来る人もいるくらいだ。

ところで、この米作りはいつ頃始まったのだろうか。祖父はこう言った。

「江戸時代に新田開発をしたときに、一緒に大きなため池も作ったそうや。大池のそばの石碑に掘ってあるか

ら見てき。」

保育所からの帰りに見る大池を初め、わたしは海だと思っていた。冬には鴨が泳ぎ、祖父が子供の頃は、凍った池の上でスケートができたそうだ。自転車で見に行くと、草むらの中に石碑があった。

「寛永五年藤堂藩城和奉行加納藤左衛門直成の差図により友田村庄屋三右衛門以下村人協力一致この大溜池を築造す」、「築造三百五十年記念に祖先の偉業をたたえて建造す」

「寛永」、どこかで見た文字だなと思い、歴史の教科書を開いた。すると、江戸の三代将軍、徳川家光の時代で、島原天草一揆が起こったり、寛永通宝が作られたりした時だと分かった。ブルドーザーやショベルカーなどの重機もない大昔だ。「村人協力一致」とあるから、村人

が大勢集まって、くわやすきを使って掘ったのだろうか。一体どれくらい年月がかかったのだろう。江戸時代には何度も干ばつや日照りによる飢きんが起こったと習った。米作りには大量の水が必要だ。きつと村の人たちは安定した農業用水を確保するため心を合わせ、「協力一致」したのだろう。今から四百年近い昔の風景が目には浮かぶようで、祖先がとても身近に感じられた。

この辺りでは、ゴールデンウィークはレジャーのための休暇ではなく、一家総出で田植えをする期間だ。遠くに住んでいる人もわざわざ帰ってきて手伝うので、田んぼはとてにぎやかだ。わたしの家も、祖父母だけではなく、父母や兄たちも手伝う。わたしも部活動から帰るとすぐ、体操服のまま苗を育てたトレイを水路で洗う。今年の田植えも無事終わった。祖先の苦労があったからこそ、水不足の時も農業用水が確保され、今まで米作りを続けてこられたのだとつくづく思う。

数年前のことだが、この大池に工場排水が流れ込むかもしれないと聞いて、村の人々が一丸となって抗議し、防ぐことができたということがある。一度汚染された水はなかなか元には戻らない。祖父も、水が汚染されたら

お米が作れなくなると、必死だった。石碑に刻まれることはないけれど、村人が「協力一致」して、この大池を守ったのだ。

わたしは、石碑の周りに草がぼうぼうと生えているのが気になった。石碑が建てられてもう四十年近く。どれだけの人がこの石碑のことを知っているのだろう。わたしも祖父に聞くまで、全く知らなかった。でも、知ってからは水と農業を守った祖先の多大な苦労を忘れず、これからも水田の広がる風景を守らなければならないと思うようになった。

石碑に刻まれた「協力一致」という言葉。これこそが今、すべての人類に必要な言葉なのではないだろうか。水は地球上を循環し、地球に住むすべての生き物の命を支えている。自分さえよければと思うのではなく、世界中で「協力一致」の精神を持ち、限られたみんなの水を無駄遣いせず、汚さず、未来へと受け継いでいかなければならないのだ。

優秀賞 水の週間実行委員会会長賞

「水を大切にする」とは

北海道 音更町立緑南中学校

三年 加藤 直也

ある日、我が家に三株のパンジーの花がやって来た。初めは大事に育てていたのだが、しばらく経つと水やりを忘れがちになってしまった。気が付いた頃には花は、しおれ気味になってしまっていた。この時、私は改めて気付いた。生き物が生きるためには、水は欠かせないということ。実は、私たちは水に生かされている。そう考える人は決して多くはないだろう。なぜなら、蛇口をひねれば水が出るのが、当たり前という環境の中で暮らしているからだ。今の私たちが、水の大切さを身体で学ぶことは極めて少ない。もしかしたら、それが「水の軽視」につながっているのかもしれない。果たして水を大切にするとすることは、どういうことなのか。

まずは普段私たちが、どれ程の水を無駄にしているのかを調査してみた。私はよく自分で食事を作ることがあ

る。恥ずかしながら、いつもは自分がお腹いっぱいになることしか考えずに作っている。そこで今回は手を洗つてから「野菜の油いため」を作り、食器類を洗うまでに、どれ程の排水を出すのかを調べた。調査は二回行った。条件はそれぞれ一回目は「いつも通り」、二回目は「節水を心がけながら」作るということ。材料の分量等、この他はすべて同条件で行ってみた。すると、驚くべき結果が出た。一回目に出た排水は、約五六五〇ミリリットル。二回目は、約三七〇〇ミリリットルだった。つまり、今回の調査では、約一九五〇ミリリットルもの水を節水できるということがわかったのである。それにしても、どうしてここまで節水できたのか。理由は二回目の「節水を心がけながら」作る場所にある。具体的には、「野菜や食器を洗う時は、水を出しすぎず、出しっぱなし

にしない。」こと、「洗剤は最小限におさえて、食器をゆすぐ水を減らす。」ということを意識するのだ。そうするだけで、約三分の二にまで排水量を減らすことができたのである。私はこの調査を行ってみて、正直、本当に驚いた。節水することは、いかに簡単なのかを知ったからだ。それと同時に、こんなに簡単にできることを、なぜ世のすべての人たちがしないのかとても不思議に思った。

今、コンビニに行けば、生活に必要な物をほとんど買うことができる。そのコンビニで目にしたのは、「名水でつくられた水」。私はこれを見て、ふと思った。水を大切にしない私たちにワンランク上のものを要求する資格があるのかと。上下水道が普及している現代、私は飲料用にも水道水で十分だと思う。しかし、最近では、名水やアルカリイオン水といった良品質の水を好む志向が高まっている。それ自体を否定するわけではないが、現代人の多くは、「水を選ぶ域」に達していないように思える。そんな私たちの望みがかなえられてしまつて、便利な「水世界」になつてしまった。それが、水のありがたみを忘れかけてしまう原因になつたとも言えるのではないだろうか。

水を大切にするということは、「水に恩返しする。」⁷ ことではないか。今後も私たちが生かしてくれる水に私たちの手で休養を与える。そんな気持ちで、アクションを起こす時期にきている。節水を当たり前前にできるように、一人ひとりが意識を高めていきたい。洗面所のシャワーの流しっぱなしを一日一分短くすれば、水道代が四〇〇円節約できることを、あなたは知っているだろうか。水は無限にあるわけではないことを、あなたは知っているだろうか。そんな「水知識」を高めることが、水を大切にすることにつながるのだ。水質汚染の最も多い原因は家庭排水。しかし、裏を返すと家庭で気を付ければ、水質汚染をくい止めることができるはずだ。水の未来は私たちにたくされている。

水さん、ありがとう。これからは恩返ししていくよ。

優秀賞 独立行政法人水資源機構理事長賞

富郷ダムと祖父の山

徳島県 徳島市立南部中学校

一年 林 正 基

祖父の故郷は愛媛県新宮村（現在の四国中央市新宮）である。緑が多く、生家のすぐ横を川が流れ、夏にはキャンプ場として賑やかになり、冬には雪が積もる。日々忙しく、時間が足りないと感じながら過ごしている両親やぼくだが、新宮はそんなぼく達を温かく、そして優しく迎えてくれる癒しの場所である。

祖父は今七十七歳。祖父から聞く話は、七十七年間祖父が歩んできた歴史を知ることができ、いつも楽しくわくわくする。

十三才のぼくの誕生日、祖父がまた話してくれた。それは新宮にある「祖父の山」のことだ。

「新宮にあるじいちゃんの山の一部は、富郷ダムを造る時、ダムに沈んだんよ。たくさんあった木も切り出されてなあ。ダムを造るには、大勢の人が動いて、長い時

間がかかったんじゃ。」

祖父は普段無口で冷静だが、故郷を語る時は、目を輝かせ少年のようになる。そして、おしゃべりになる。

それにしても、ダム建設に祖父の山が関係していたなんて…。

「水資源開発公団」から届いた数々の郵便物をぼくに見せながら、祖父の話は続く…。

平成五年に届いた用地調査についての書類を初めとし、説明会・実地調査・補償交渉・登記など祖父が富郷ダム建設にかかわった年月は八年に及ぶ。公団の方々は土地所有者の方々に何度も会い、説明に回り、地道な努力を続けられたそうだ。

「いくら仕事とは言え、説明会を夜遅くまでして、公団の人は本当に頑張っていた。懐かしい場所を手放

すことに抵抗はあったけど、誠実な態度に感激して、山を手放す決心をした。何より水は、人間の暮らしに欠かせないものやけんな。」

祖父の目が、一段と輝いた。

「じいちゃん、かつこいい。」とぼくは思った。

富郷ダムについてインターネットで調べてみると、建設工期は、昭和四十九年四月から平成十三年三月まで、二十七年間もの時をかけ造られたことが分かった。都市用水の供給と発電を目的に住む人々に快適な暮らしをしてもらうために建設されたのだ。

祖父の話聞いたぼくは、普段身近にある『水』について改めて考えた。ぼくの住む徳島は、東西に吉野川が流れ、自然に恵まれた暮らしやすい土地だと思う。蛇口をひねればきれいな水がすぐに出る。もちろん生まれてから水不足を体験したこともない。

父や母も、「これまで水について深く考えたことはなかったし、節水することさえできていたかどうか分からない。恥ずかしい話やな。またじいちゃんから大切なことを教えてもらったな。」と言っていた。

恵まれた環境からぼくは、水は限りなくあるものだ

知らず知らずのうちに思い込み、錯覚をしていた。

でもそれは間違った考えだった。現に人々の暮らしを守るため、ダムは人工的に造られたものである。ダム建設にかかわった大勢の人々の努力や、祖父のように大切に懐かしい場所を提供した人々のおかげでできたものである。

祖父の話から、ぼくは忘れてはならない大切なことを学んだ。

「資源は限られている。だから大切にしなければならぬ。」

スギ・ヒノキ・マツ・クヌギ・クリ・ビワ……。祖父の山から切り出された数々の木々と山は、周辺に住む人々に水を供給するという大切な役目のためダムとなった。

ぼくは、静かに時間が流れ、ぼく達家族の癒しの場である新宮をまた訪ねてみたくなった。

優秀賞 国土交通省土地・水資源局水資源部長賞

やしたり、野菜を洗ったりする「冷蔵庫や台所」だ。水

命の泉「カワ」

鹿児島県 十島村立口之島中学校

二年 中村 まち

皆既日食の年がやってきた。私の住むトカラ列島は日食ムードでいっぱいだ。ある日、テレビでトカラ皆既日食が取り上げられるということで、私はワクワクしてテレビをつけた。「今、悪石島では日食期間中の水不足が心配されています。」水がない？私の住む口之島では、水不足は問題になっていない。同じトカラ列島なのになぜ？

口之島に水があるのは、泉のおかげだ。山からの水がこんこんと湧くこの泉を、私たちは「カワ」と呼んでいる。カワは、用途別に複数のマスに分けられている。ガジュマルの根元からあふれる水は、最初のマスへ流れ込む。ここは飲料水用だ。夏の暑い日、木漏れ日の反射する水をすくって一口飲むと、生き返った気がする。水は次のマスへ。ここでは、海から揚がったばかりの魚を冷

はさらに流れて最後のマスへ。ここは、「お風呂や洗濯機」だ。また子供たちの練習用プールとしても使われていた。ここで泳ぎをマスターすると、海で泳ぐことが許されたらしい。

このカワは絶えることがないと言われている。でも、人々は水用途別に繰り返し使い、大切にしてきたのだ。なんて素晴らしい考え方だろう！便利になった今でも見習うべき知恵だと思った。例えば、手を洗った水や米の研ぎ汁を花の水やりに使う。お風呂の水を洗濯に使う。また、歯磨きをする時は、こまめに水を止める。このように、「水は貴重だ。」と意識し、行動を起こすことが大切だ。そうして、先祖代々から伝わる水に対する思いを引き継いでいきたいと思った。

さらに、私は、カワを中心にこの島の歴史があったことに深い感動を覚えた。船が運んでくる生活物資を考えると、港の近くに集落がある方が便利な気がする。しかし、この島は、山手に集落が集まっている。それは、カワがあるからだ。つまり、船より水の方が生活に欠かせないし、「カワは命の泉」だと考えられたのだ。カワは、涼みながらおしゃべりを楽しむ場であり、子供たちが泳ぎを覚える場でもある。また、土の付いている野菜は、下手で土を洗い落としてから上手で他の野菜と一緒に洗うというように、みんなを思いやるルールもあった。カワが長い間築いてきた人と人との触れ合いを思ったとき、私は深く感銘を受けた。そして、このカワをみんなが守ってきてくださったことに感謝した。このカワのおかげで、今も私たちはおいしい水を飲むことができるし、島民との交流も続いている。

この感謝の思いをみんなに伝えたい・・・。

私たちは文化祭で、カワを題材にした劇を披露した。

「早く水をくんでこなか」慌ててカワに風呂の水をくみに行く子供の様子。「お前たち、そんな泳ぎじゃあ、まだ海で泳げんどお」カワをせきとめて、泳ぎの特訓をして

いる様子。そして、子供たちがカワに冷やしてある魚の目をおやつ代わりにつまみ食いしていた様子。島のおじいちゃんやおばあちゃんたちは大笑いし、また、昔を懐かしんで涙してくれた。

日食のニュースがきっかけで、この島の水に対する思いに改めて気付くことができた。私たちの先祖は、水に限りある資源ととらえ、大切に、しかも最大限に活かしてきた。今では水道を使うことが多いが、カワは「人々の心の拠り所」になっている。七月のトカラ皆既日食では、島外からたくさんの人々がこの島を訪れる。カワで涼み、おいしい水でのどをうるおして欲しい。島の人々が集まる場所なので、いろいろな話が語られるに違いない。そして、水によって命が支えられてきていることや水に関する島の知恵や歴史を、日食の思い出とともに持ち帰ってもらいたいと思っている。

優秀賞 全日本中学生水の作文コンクール

中央審査会特別賞

私は小学生の時、学芸会で「幌向の夜明け」という劇

先人からの贈りもの

北海道 岩見沢市立豊中学校

三年 武石 早代

「もう少しで刈り入れだというのに、また全部、だめなのかね。」

私の住んでいる町、幌向は、石狩川に隣接しているため、数えきれないほど何度も洪水に遇ってきました。その昔、明治初期に幌向の開拓が始まる頃から、幌向の住民は洪水と戦ってきたのです。でも、私は生まれてからずっと幌向に住んでいます。一度も洪水に遇ったことはありません。なぜなら、今は川沿いの堤防もしっかりと築かれていて、よほどの大雨でない限り水は上がってこないからです。ですが、この水害の多かった幌向の地で今私達が安心して暮らせるのも、先人達の計り知れない苦労があったからこそなのです。

「とにかく、何とかならんもんかなあ。」

を演じました。これは、幌向が開拓され始めた頃、水害に悩まされていた開拓者達が話し合いの末、力を合わせて堤防を築き上げる、という幌向らしい劇でした。私は幌向の村人役でした。私のセリフは「なあ皆、こうなりや周りばかり頼っててもだめだ。俺達の手で、堤防を築くべや。」と、その費用はどうするのかという問いかけに「皆で出すんだ。」と答える二つだけでした。しかし、私はこのたった二つのセリフを言うのにとっても苦労しました。なぜなら、皆にお金を出して堤防を築こう、と提案する大事なセリフだからです。昔、お金もなく、洪水で疲れ果てた開拓者がどれほど思い切ってこの言葉を発したかと思うと、この言葉がすごく重く感じられました。今、堤防を築いてしまわなければ、村は毎年洪水に

苦しめられ、村を出ていく人をまた増やしてしまうだろう。どうにかしなければ。そんな気持ちの込められたセリフでした。

「そうね：このままじゃ私達、本当に村を出て行かなくてはならなくなりますよ。」

「確かに、そうだ：ようし、やるか、堤防を築くんだ。」

「そうだ、そうだ。皆の村を皆の力で守るんだ。」

こうして幌向と水との長い戦いが始まったのです。川に囲まれた幌向。洪水で、多くの人がたくさん苦労したはずです。私達が演じた堤防づくりのあとも何度も襲ってきた洪水を、幌向の人々は力を合わせて乗り越えてきました。堤防や家が壊れても、幾度でもつくり直し、洪水に立ち向かってきました。

そして、ようやく幌向の長い長い夜が明けたのです。川は、静かにゆっくりと流れています。魚が住み、川沿いには家も建ち並んで、幌向の川辺には平和な風景が広がっています。

でも今、実際に川に行つて目につくものは汚れた水とゴミです。私はショックを受けました。こんなに汚してしまつては、川のためにたくさんの方々の苦労をした人々の努

力を無駄にしてしまうのではないかと思いました。

蛇口をひねればきれいな水がどんどん出てくることは、今の私達にとってはごく当たり前のことです。ですがそれは、先人達が水に対して多くの苦労、時間、お金を注ぎ込んでくれたからできていることなのです。それなのに私達はそういう歴史を振り返ることなく、平気で無駄使いをし、汚しています。忘れてはいないでしょうか。今、洪水の心配もなければ、自由に水を使えるのも、すべて先人達のおかげだということを。先人達が望んでいた、水に困らない時代。それはやっと実現しましたが、先人達は、私達に水を汚したり、無駄使いをして欲しくて水と戦ってきたわけではないはずです。この水に恵まれた今に至るまでの長い道のりを、私達は決して忘れてはいけません。先人達の苦労をかみしめ、水を大切に使うこと。それが、今私達が一番にしなければならぬことだと思えます。